

第6章 まとめ

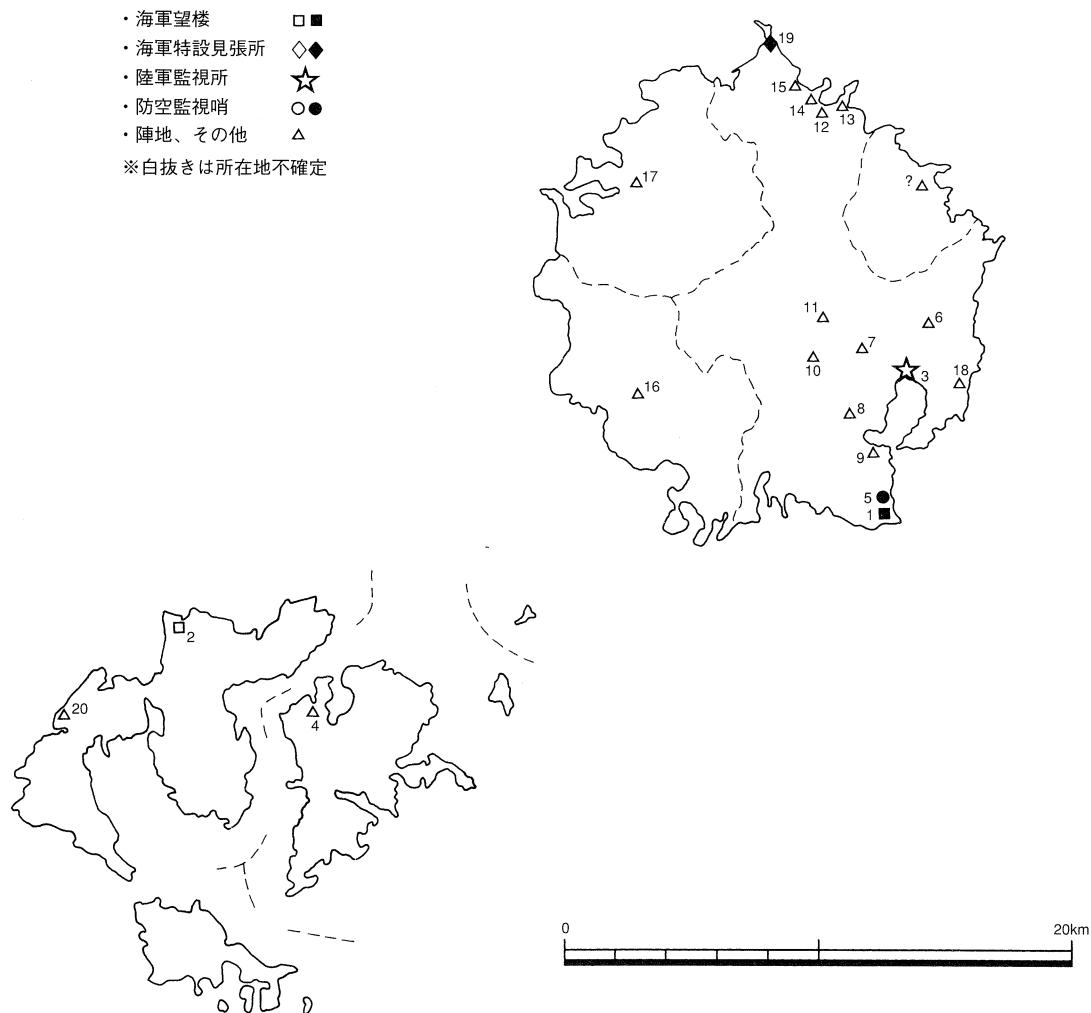
今回の御崎谷遺跡と大床遺跡の2遺跡の発掘調査では、日露戦争とその後の第2次大戦に係わる戦争遺跡を明らかにすることことができた。このような戦争遺跡について、隠岐をはじめとして島根県下における状況について、この章では概観して本書の締めくくりとしたい。

第1節 隠岐の近代の戦争遺跡

隠岐は周辺を日本海に囲まれていることから、古代より国際関係が緊張した情勢になった期間は、海防のための施設や人員が置かれた場所である。古代には新羅との緊張関係の中で、特に9世紀頃には頻繁に中央から警護を固めるよう命ぜられており、また869年には弩史を置いていた。また、幕末の外国船警備の為に松江藩によって見張所や台場が設置されている^⑨。

近代では日露戦争や大戦に係わる緊張関係の中で軍事施設が置かれていた。これらの軍事関係の遺跡（いわゆる戦争遺跡）については、知り得る限りのものを表26に集成し、分布図（図56）を掲載している。

日露戦争前後の軍事施設 日露戦争前後に関連した軍事施設では海軍望楼が設置されている。また、日露戦争勃発後の1904（明治37）年には海底電線揚陸地点（西郷町東郷塩浜、海士町太井・菱



第56図 隠岐の戦争遺跡

浦) の警備のため陸軍が監視兵を西郷町と海士町菱浦に派遣している^⑩。

海軍望楼は西郷町岬町(御崎谷遺跡)と西ノ島町の高崎山の2か所に設置されている。西郷海軍望楼は1898(明治31)年に設置された常設の海軍望楼であり、高崎山海軍望楼は日露戦争開始後の1904(明治37)年6月に設置されたものである^⑪。おそらく高崎山に設置した背景には、西郷海軍望楼ではカバーできない隠岐の北側の海上を監視強化する目的が推測される。また、日露戦争後にはこれらの海軍望楼は廃止されているが、高崎山海軍望楼については、廃止された年月日やその設置された現地について今後の調査が必要である。

1904(明治37)年2月に海底電線揚陸地点の警備のために陸軍が派遣した監視兵は、西郷と菱浦の2か所存在するが、これは日露戦争勃発に対応して陸軍が沿岸監視を兼ね有線通信網の防御をねらったものと推測される。これらの監視兵派遣に伴う施設等については明らかにできていないが、おそらく官舎等の施設が設置されている可能性が推測される。

大戦に係わる軍事施設 大戦に係わる施設は、島後については西郷町誌によって明らかにされているが、島前については調査不足もあり今後の調査が必要である。また、警察署に管轄された防空監視哨は西郷(大床遺跡)に1か所設置されているが、島前など他の場所にも設置されている可能性は考えられ、今後の資料調査によって明らかになるものと思われる。

大戦中の防御陣地は13か所の所在が西郷町誌によって明らかになっているが、これらの現地の状況等についての詳細な調査が今後必要なものである。その他に陸軍と海軍の監視部隊と考えられる部隊が西郷町に置かれていた。

海軍のものは「島後特設見張所^⑫」と呼称されていたもので西郷町西村に存在していた。これは、「電波探信機」と呼ばれたいわゆるレーダーを装備したものであり、その敷地面積は1万m²以上と大規模なものであった。

表26 隠岐島の近代の戦争遺跡

番号	戦争遺跡	内容	所在地	備考
1	西郷海軍望楼	明治海軍の監視所	西郷町岬町	(御崎谷遺跡)
2	高崎山海軍望楼	明治海軍の監視所	西ノ島町	
3	(西郷)	海底電線揚陸点監視	西郷町	明治37年に監視兵派遣
4	(菱浦)	海底電線揚陸点監視	西郷町海士町	明治37年に監視兵派遣
5	西郷防空監視哨	大戦中防空監視施設	西郷町岬町	(大床遺跡)
6	岩上陣地	大戦中の陣地	西郷町	特設警備隊201大隊(西部第7159部隊)
7	粟舞太松陣地	大戦中の陣地	西郷町	✓
8	埋山陣地	大戦中の陣地	西郷町	✓
9	飯ノ山陣地	大戦中の陣地	西郷町	✓
10	高野陣地	大戦中の陣地	西郷町	✓
11	仏谷陣地	大戦中の陣地	西郷町	✓
12	正面陣地	大戦中の陣地	西郷町中村	✓
13	左水の滝下陣地	大戦中の陣地	西郷町中村	✓
14	天神山陣地	大戦中の陣地	西郷町中村	✓
15	西村分掌陣地	大戦中の陣地	西郷町西村	✓
16	千光寺山陣地	大戦中の陣地	都万村	✓
17	北方陣地	大戦中の陣地	五箇村	✓
18	陸軍監視所(分遣隊)	大戦中の監視所?	西郷町犬来	西郷町東郷か?中部軍通信部隊隠岐支隊
19	島後特設見張所	大戦中のレーダー基地	西郷町西村	海軍監視部隊
20	(国賀海岸)	不明	西ノ島町国賀	コンクリートによる構造物

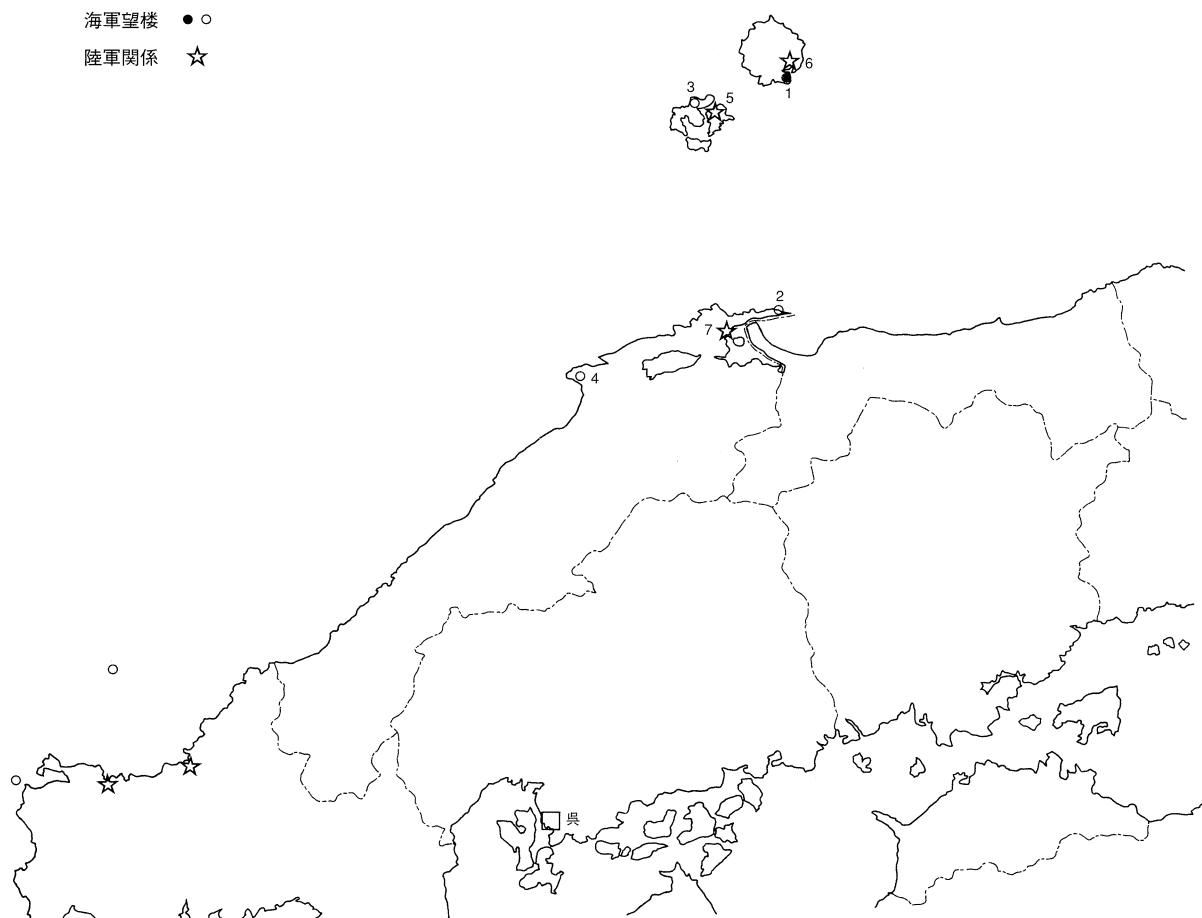
さらに、これは対空レーダー3基を装備し対空監視を行っていたものであるとともに、対水上艦艇専用見張所として計画設置されており、水雷兵器を装備していたが、対水上用レーダーは装備されていなかったものと考えられる。

陸軍の監視所^④は西郷町東郷に所在していたと推測されるが、これについては西郷町誌の記述が無いものである。可能性として西郷町誌にある西郷町中町に本部を置き、西郷町大来に分遣隊を置いた通信部隊が該当するのかもしれない。この監視所については今後の調査で整理しておく必要がある。また、西ノ島町の国賀海岸にコンクリートによる構造物が存在しており、監視所と伝えられているが実態は明らかにできなかった。

このように隠岐には近代の戦争に係わる施設が多く存在している。これは日本海に囲まれた地理的環境が大きな要因と考えられ、また、大戦中には多くの防御陣地が築かれたように、最前線に立たされる状況も想定される環境に置かれていた。

第2節 日露戦争前後の戦争遺跡（沿岸監視関連）

この節では、島根県下の日露戦争前後の戦争遺跡について述べたいが、特に日本海沿岸部の監視に係わるものを紹介したい。この時期の沿岸監視に係わるものは海軍望楼と陸軍の海岸監視哨があるが、県下では海軍望楼^⑤が4基設置されている。



第57図 日露戦争前後の戦争遺跡位置図

また、1904（明治37）年2月に海底電線揚陸地点監視のため監視兵が派遣された場所が3か所あり、これに伴う施設の存在が想定される。

海軍望楼 海軍望楼は海軍省が主に沿岸監視の目的で設置したものであり、全国に120か所程が設置されている^⑨。日露戦争中は79か所が機能しており、そのうち県下には4か所に設置されていた。今回発掘調査した西郷海軍望楼、そして美保関海軍望楼は日清戦争後に設置された常設の海軍望楼である。この時期の段階では他地域の日本海沿岸部にも多く設置されており、ロシアとの国際情勢が緊迫する中で日本海沿岸監視強化の目的をもって設置された望楼として位置付けられているものである。また、両望楼とも1903（明治36）年に無線電信機が装備された望楼20か所^⑩に含まれるものである。

残り2つの高崎山海軍望楼と杵築海軍望楼は、日露戦争勃発後の1904（明治37）年に設置された仮設の海軍望楼である。常設と仮設の相違については資料調査の不足で不明であるが、この2つの望楼が設置されたことによって、島根半島の東端と西端、隠岐島の南北を監視できる体制を整備強化したものと推測される。なお、この2つの仮設望楼は日露戦争終了後まもなく廃止されている。

陸軍監視兵派遣箇所 1904（明治37）年の日露戦争勃発直後に隠岐島海底電線揚陸地点の監視警戒の任務を担った監視兵が3か所に派遣されている。当時の海底電線揚陸地点を見ると松江－西郷線が美保関町千酌から海士町大井を経て海士町菱浦と西郷町東郷塩浜に分岐している^⑪。このことから派遣された監視兵は美保関町千酌、海士町大井・菱浦、西郷町東郷塩浜の各地点を監視警戒していたものと推測される。これらの派遣された監視兵に係わる監視所、官舎等の施設が存在していたと思われるが、資料調査によって裏付けて整理していく必要がある。

まとめ 以上、日露戦争前後の軍事施設について述べてきたが、日本海に面した環境から県下に多くの施設が存在しており、特に隠岐島は海上の警戒監視の上で重視されていたことが分かる。

なお、これらの中で西郷海軍望楼以外のものについては詳細な所在地が不明であり^⑫、文献資料調査が不十分である。今後の現地での確認と防衛庁防衛研究所に保管されている資料の検索によって明らかにすべき点は多い。それによって海軍望楼の構造についての検討、常設と仮設の比較、陸軍の沿岸監視哨との比較、勤務状況などについての検討が今後可能になってくるものと考えられる。

表27 日露戦争前後の戦争遺跡（沿岸部監視関係）（註13文献より）

海 軍 望 楼				
番号	名 称	所 在 地	時 代	内 容
1	西郷海軍望楼	隠岐郡西郷町岬町	明治31. 2. 3設置	常設の海軍望楼
2	美保関海軍望楼	八束郡美保関町	明治34. 12. 14設置	常設の海軍望楼
3	高崎山海軍望楼	隠岐郡西ノ島町	明治37年6. 21設置	
4	杵築海軍望楼	簸川郡大社町	明治37年8. 9設置	
陸軍監視兵派遣か所				
5	(菱浦)	隠岐郡海士町	明治37年頃に派遣	海底電線揚陸点監視
6	(西郷)	隠岐郡西郷町東郷	明治37年頃に派遣	海底電線揚陸点監視
7	(千酌・本庄)	松江市本庄町	明治37年頃に派遣	海底電線揚陸点監視

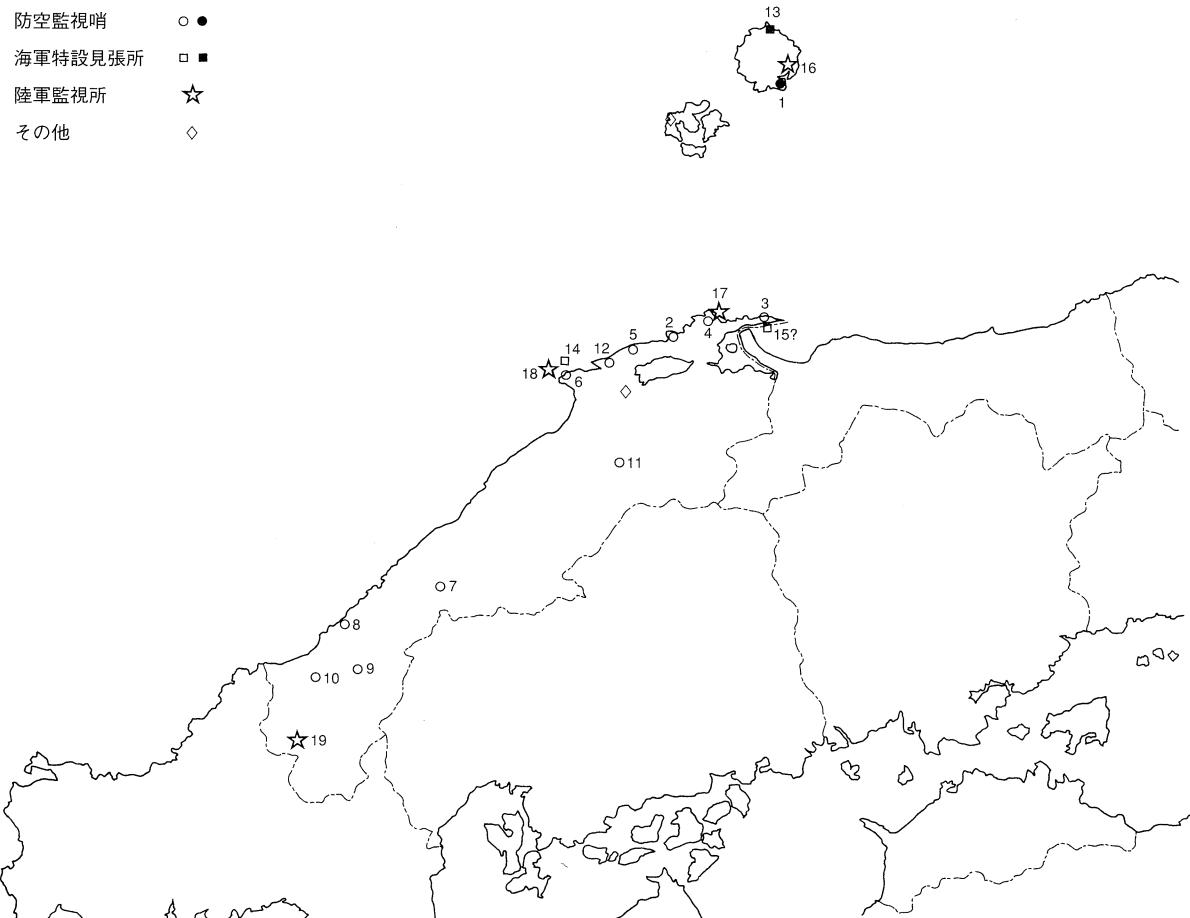
第3節 第二次大戦中の戦争遺跡（監視施設）

この節では、大戦中の島根県下における監視施設を中心に述べてみたい。監視施設は防空監視哨、海軍特設見張所、陸軍監視所の3つが設置されている。

防空監視哨 防空監視哨は1937（昭和12）年成立の防空法を契機にして、島根県警察署が執行機関として各地に設置したもので、県下に38か所存在する。これらは基本的に沿岸部や山頂部に設置され防空監視をおこなったもので、敵機の飛行状況についての情報を電話によって各防空監視隊本部（松江・浜田・隱岐西郷）へ連絡していたようである。なお、防空法からも分かるようにこれらの監視哨は基本的に一般市民が行う防空対策を担う目的で設置されており、軍が行う防空とは異なるものであった。

監視哨の従事者は20歳以下の若者が主力であったようである。その本体構造は「聴音壕」と呼ばれる二重壁の円筒状構造物であり、その中で目と耳によって敵機を監視警戒していたものである。また現在所在地が分かる例から推測すると、聴音壕の他に管理棟が付属するのが一般的である。なお、全国の一部では「電波警戒機^⑩」が配備された防空監視哨が存在していたようであるが、県下の配備状況については現段階では不明である。

海軍特設見張所^⑫　海軍の監視施設は「電波探信機」と呼ばれるいわゆるレーダーを配備し、通信機器を備えていたものであった。これは県下に3か所設置されており、対空レーダーを装備している見張所である。このうち島後と日ノ御崎は基本的に装備された機器や数量は同じであるが、島後



第58図 第2次大戦中の戦争遺跡位置図

は水雷兵器を装備しており、対水上艦艇監視も目的としていたものである。また、敷地面積について見ると、島後のものは非常に大がかりなものであったことが分かる。

一方美保関の見張所は航空基地に伴う対空レーダー装備の監視施設である。

陸軍監視所 陸軍監視所は現段階の調査では不明な点が多いものであるが、断片的な資料から防空監視をおこなっていた施設と推測される。その内容、設備等については不明な点が多く、今後の調査が必要である。県下には隱岐郡西郷町、島根町野波、大社町日御崎、津和野町の4か所に設置されていた^⑩。

まとめ 以上述べてきたように、大戦中には海軍、陸軍と民防空組織の3者による監視体制が採られていたことが分かり、多数の施設が存在していたことが窺える。また、大社町日御崎は陸・海・民の、美保関町には海・民の、島根町野波には陸・民の監視施設が、それぞれ近接して存在していたことになり、防空監視などの要地として認識されていたことが分かる。これら3者の監視施設の関連については今後検討が必要であるが、防空通信の連絡協調は無くそれぞれが独自に監視していくようである^⑪。

表28 第2次大戦中の戦争遺跡（監視施設）

防空監視哨（註40文献、西尾良一氏資料より）

番号	名 称	所 在 地	形 态	内 容	備 考
1	(西郷) 監視哨	隱岐郡西郷町	聴音壕（レンガ）	建物跡、横穴	大床遺跡
2	恵曇監視哨	八束郡鹿島町恵曇			
3	美保関監視哨	八束郡美保関町			
4	野波監視哨	八束郡島根町多古鼻	聴音壕？		
5	佐香監視哨	平田市小伊津町高山	聴音壕(コンクリート)	管理棟跡、塹壕	西尾良一氏資料
6	日御崎監視哨	八束郡大社町日御崎			
7	石見今市監視哨	那賀郡旭町今市			
8	三保監視哨	那賀郡三隅町三保			
9	津茂監視哨	美濃郡美都町津茂			
10	小野監視哨	益田市白岩町小野			
11	掛合監視哨	掛合郡掛合町天神平	建物上		
12	(十六島) 監視哨	平田市（通称丸山）	聴音壕(コンクリート)		西尾良一氏資料
合計38か所（不明26か所）					

海軍特設見張所（註33文献より）

13	島後特設見張所	隱岐郡西郷町中村	用地	13,967m ²	対空レーダー3基、送信機2、全波受信機1、自力発電機2、水雷兵器132	水上艦艇専用見張所を兼ねる
			居住施設	300m ²		
14	日ノ御崎特設見張所	簸川郡大社町日御崎	用地	3,934m ²	対空レーダー3基、送信機2、全波受信機1、自力発電機1	
			居住施設	89m ²		
15	美保特設見張所	(八束郡美保関町)	不明		対空レーダー2（航空基地）	
合計3か所						

陸軍監視所（註43文献より）

16	(東郷)	隱岐郡西郷町東郷	不明	不明	
17	(野波)	八束郡島根町野波	不明	不明	
18	(日御崎)	簸川郡大社町日御崎	不明	不明	
19	(津和野)	鹿足郡津和野町	不明	不明	
合計4か所					

第4節 小結

この章すでに述べてきたように、県下には各戦争に係わる監視関連施設が多数設置されている。また、これらの監視施設以外にも多くの施設が存在していることは言うまでもない。本節ではこれまで述べてきた調査した御崎谷遺跡・大床遺跡や県下の戦争遺跡についての今後の調査における課題点等について整理して終わりたいと思う。

戦争遺跡の調査 島根県下において、いわゆる「戦争遺跡」と近年呼称されているものについての調査はいくつかの例^⑤が見られるが、本格的な考古学的調査は今回の御崎谷遺跡と大床遺跡が初例となるものと考えられる。この調査によって考古学的な調査からあらゆる情報を提供可能なものであることが判明した。もちろん今回の調査でも分かるように、文献資料と聞き取り調査によって初めて施設の性格等について明らかにできるものである。このように戦争遺跡の調査には、考古学的な調査、文献資料調査、聞き取り調査といった3つの異なる調査方法が必要不可欠なものであり、これらの調査成果によって初めて史料として活用が可能なものになることは、すでに述べられている通りである^⑥。そこで調査における方法論ごとに以下に若干の検討をしてみたい。

考古学的調査 この章で挙げた施設については、ほとんどのものが現地については確認していないものであり、今後その所在についての確認作業（いわゆる分布調査）が第一に必要と考えらえる。そして、その構造等について把握できるものについては記録する必要がある。また、発掘調査を行った場合には、遺構、遺物については比較が可能なうちに資料化する必要があるものである。この資料化することによって他の調査例との構造の比較、出土遺物の検討が可能になるものと思われる。例えば、東京都大橋遺跡の調査^⑦のように使用者の階級と食器との関係や統制番号の付いた陶磁器から戦時下の流通について検討ができるようになるものと思われる。また、様々な出土遺物から兵舎等での生活の一端が窺えることも可能と思われる。

文献資料等の調査 文献資料の調査は、特に防衛庁防衛研究所に所蔵されている公文書等の資料調査が重要になるものである。これによって今回の御崎谷遺跡のように軍事施設の所在地の特定が可能になる場合がある。また、資料によってはその性格、設置年月日、構造、敷地面積等についての把握が可能になるものと思われ、特に大戦中の施設については終戦時の米軍への兵器類の引き渡しに係る目録から多くの資料を得ることが可能である。

また、今回大床遺跡で検出した民防空に係わる防空監視哨については都道府県の警察に資料が残存している可能性があり、これによって防空体制の実態が明らかになるものと思われる。なお、大床遺跡では今回この調査が不十分であり、今後の検討が必要なものである。

文献資料の他にも当時の写真が残存していれば非常に重要な情報であり、遺構のように下部構造しか分からぬものに対して上部構造の解明が可能になるものである。大床遺跡でも他の監視哨の写真から上部構造を推測することができた。さらに当時の勤務者の服装、階級等について推測が可能になる場合も考えられる。

聞き取り調査 今回の調査において、大床遺跡では当時の勤務者からの聞き取り調査によって検出遺構の性格、勤務状況等について明らかにできた。このように大戦中の施設については、付近に当時の施設について情報提供が可能な人々が存在しており、聞き取り調査は非常に重要な情報を得ることが可能な方法である。さらに実際に出土遺物を手にとってもらうといった調査も必要であり、重要な情報が得られたと思われるが、今回は出来なかった。この点に関しては今後の調査が必要で

あることを痛感している。また、聞き取り調査において証言者によっては推測等が混在している場合が考えられることはすでに指摘されており^①、慎重に調査を行う必要もある。

聞き取り調査は、複数の証言を慎重に重ねることによって多くの事実が浮かび上がる重要な方法である。しかし、当時を知る者の高齢化が進むといった大きな問題も抱えており、この調査方法が可能な期限は迫っており、緊急性の伴うものである。

以上脈絡も無く述べてきたように、それぞれの調査方法によって近代の戦争遺跡の実態を明らかにしていく必要がある。そして、各遺跡が資料化され比較検討されることで、「戦争の世紀」と呼ばれる20世紀を検討する材料になるものと思われる。

今回の御崎谷遺跡・大床遺跡の調査は、不十分な点があり課題点も多いものであるが、「戦争遺跡」への関心を呼ぶ契機となり、今後の近現代史の史料として活用され、新たな21世紀において平和を考える上での資料として貢献出来れば幸いである。

(註)

- ① 法政大学多摩校地遺跡調査団編『法政大学多摩校地遺跡群 I—A 地区—』1986年
同上『法政大学多摩校地遺跡群 III—C・R 地区—』1988年
伊藤玄三「現代史を掘る—多摩送信所（法政大学構内）の発掘より—」『考古学ジャーナル』278、1987年
伊藤玄三「東京・多摩送信所跡の調査」『季刊考古学—近・現代の考古学—』72号、2000年
- ② 2000年度調査の御崎谷 II 遺跡（海軍望楼官舎跡）では、ほぼ同一の建物跡が検出されており、この礎石 7 に対応する礎石が存在している。調査担当者の伊藤徳広氏（県埋文センター）の教示による。
- ③ 東森晋氏（県埋文センター）の教示による。これによれば、四斗入りの大甕の中に、五升瓶が2本、二升瓶が3？本、切片口鉢が3つ入れられて出荷されていたものと考えられる。
- ④ 陶磁器の産地については、家田純一氏（佐賀県立九州陶磁器文化館）に多くの御教示をいただいた。基本的に肥前系としたものは、検討していただいた結果である。瀬戸美濃系としたものは、肥前系以外のものを一括している。詳細な検討や指導を受けたものでないので、今後の検討が必要な点である。
- ⑤ 通信省編『通信事業史』第3巻 1940年 通信協会
- ⑥ D. アボット編、渡辺正雄監訳『世界科学者辞典 4—物理学者—』1986年 原書房
大井才太郎『電信及び電話』電友社 1894年
マグローヒル科学技術用語大辞典編集委員会 1985年『マグローヒル科学技術用語大辞典 第2版』日刊工業新聞社
- ⑦ 西郷町在住の池田金次氏によると昭和20年代に勤務していた電電公社では、電力が十分で無いために通信機の電力としてダニエル電池が使用されていたそうである。そこでは、10個つないだものが1組で、電池室には2～3組置かれていたとのことである。また、銅がすぐに錆びつくために頻繁に手入れが必要であったという。
- ⑧ 前掲書『通信事業史』第3巻より
- ⑨ 明治24年度に国内で要した電池材料は、「丹礬約1万貫、亜鉛板1万個、銅板8千個、亜鉛銅板6万5千個、楕円瓶4万3千個、長平瓶2万6千個」であり、楕円瓶（素焼き容器と想定）が圧倒的に多い。なお、丹礬は硫酸銅である。
前掲『通信事業史』より
- ⑩ 瓦の名称等については以下の文献を参照した。また、熱田貴保氏（県埋文センター）の教示による。
島根県教育委員会 1992年『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財調査報告書』
内藤正中編『図説日本の歴史32—島根県の歴史—』河出書房新社
- ⑪ 明治の海軍省の公文書には、望楼設置に係る土地の献納についての文書が存在し、その付図の場所が御崎谷遺跡と一致している。「現地領取済御届」明治33年12月27日 『明治30年 公文備考土木上24』防衛庁防衛研究所保管
- ⑫ 電波管理委員会 1951年『日本無線史』第10巻—海軍無線史—
- ⑬ 原剛「研究資料99R04-1 国土防衛史その3—日清戦争後から日露戦争まで—」1999年 防衛庁防衛研究所戦史部
海軍望楼については、この文献を参照し、また原剛氏（防衛庁防衛研究所）本人に多くの御教示をいただいた。
- ⑭ 前掲書『日本無線史』第10巻、原剛・安岡明男編『日本陸海軍辞典』1997年新人物往来社を参照した。
- ⑮ 前掲書『日本陸海軍辞典』
- ⑯ 前掲書『日本無線史』第10巻 これによると隠岐と松江に装備されていることになる。松江とあるものは美保關に設置された海軍望楼を指すものと推測される。
- ⑰ 「火花式送信機」に分類されるもので、直流を電源に用い感應綫から空中線波長変更綫又は送信蓄電器に放電させるタイプである。前掲書『日本無線史』第10巻より
- ⑱ 前掲書『日本無線史』第10巻
- ⑲ 群馬県前橋市史には、防空監視隊で使用した「監視隊本部情報通信用紙」が掲載されており、これには発見方向、進行方向について記入する項目が存在している。前橋市史編さん委員会編『群馬県前橋市史』1984年
- ⑳ 群馬県渋川市に設置された防空監視哨の残されている写真を見ると、藁葺きのとんがり帽子状の屋根を支える柱が円

形状に5本以上配置されたものが認められる。また、鳥取県東伯郡北谷防空監視哨の写真からも6本以上の柱が見られ、屋根は藁葺きと思われる。さらに、監視哨も1段高くなっており、大床遺跡と同様に周囲に盛土が存在していたものと思われる。

- 渋川市市誌編さん委員会編『渋川市誌』1995年 鳥取県警察史編纂委員会編『鳥取県警察史』第1巻 1981年
- ㉑ 沼崎陽氏の検討にある「陶磁器工業組合一覧」を見る限りでは、統制番号は基本的に「漢字1文字・番号」といった様式で付けられている。
- 沼崎陽 1999「戦時下の『生産者別表示記号』(いわゆる統制番号リスト)を実見して」『東京考古』17 東京考古談話会 記7の文献より
- ㉒ 上野恵司 2000年「近代煉瓦」『季刊考古学—特集 近・現代の考古学—』72号 有山閣を参照した。
- ㉓ 大橋遺跡では、大型（口径17.0cm、器高5.2cm）と小形（口径10.9cm、器高5.1～5.3cm）の2種類の碗が出土しており、兵隊が使用していたものと推測されている。また戦局の悪化による物資不足から当初はアルミ製のものがホーローに変わったという証言もある。
- 桜井準也 1999「目黒区大橋遺跡出土の近代遺跡—使用者の聞き取り調査を通じて—」『東京考古』17 東京考古談話会 記5このスタンプは瓦職人の各人ごとに異なっており、職人が瓦を何枚製作したのかが分かるように押されていたものである。 熱田貴保氏（県埋文センター）の教示による。
- ㉔ 西尾良一氏の資料の写真による。平田市内の防空監視哨については西尾氏に資料を提供していただき、御教示いただいた。また佐香監視哨については、次の文献を参照した。佐香郷土誌編纂委員会編『郷土誌さか』2000年 佐香公民館
- ㉕ 実見した状況ではコンクリートによる2重構造である。また、上端部のコンクリートの不自然な広がりから周辺に盛土が施されていた可能性も考えられる。なお、実見には群馬県埋蔵文化財調査事業団の石塚久則氏にお世話をになった。また、群馬県内の防空監視哨についても石塚氏、菊池実氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）から様々な御教示をいただいた。
- ㉖ 沼崎陽氏の検討のように、それぞれの地域ごとに戦時下の陶磁器出土例を集め、その流通等についての検討が必要と考えられる。前掲 沼崎陽 1999年「戦時下の『生産者別表示記号』(いわゆる統制番号リスト)を実見して」
- ㉗ 島根県警察史編さん委員会編『島根県警察史』昭和編 1984年 島根県警察本部
- ㉘ 隠岐島後では、台場が西郷町岬と伊後の2か所にあり、遠見番が西郷町矢尾、伊後に置かれていた。なお岬の台場は調査した御崎谷遺跡周辺に存在する可能性が考えられるが、所在は明らかになっていない。
- 永海一正『近世隠岐島史の研究』1972年 報光社、田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』1979年 古今書院
中村郷土誌編纂委員会『中村郷土誌』1996年
- ㉙ 陸軍大臣が明治37年（1904年）2月12日に第5師団長に監視兵を置くために監視兵派遣を命じている。
前掲 原剛 1999年「国土防衛史その3一日清戦争後から日露戦争まで—」より
- ㉚ 明治37年6月21日内令第269号により開設。前掲 原剛「1999年」より
- ㉛ 島後特設見張所については、以下の資料によっている。
- 「海軍用地及び同施設引渡目録（追加の分）」1945年11月26日 『兵器需品引渡目録（追加）島根県』引渡目録487 防衛庁防衛研究所保管
- 呉海軍警備隊 1945年9月1日「兵器軍需品施設等目録」「警備隊・保安隊・潜艦基地隊・在勤武官 引渡目録」引渡目録153 防衛庁防衛研究所保管 電波管理委員会1951年『日本無線史』第10巻
- ㉜ 陸軍監視所については、以下の文献の「進駐軍説明資料」に見られる。
- 島根県警察史編さん委員会編『島根県警察史』資料編 1986年 島根県警察本部
- ㉝ 海軍望楼については、網羅的な検討が行われている以下の文献を参照した。前掲 原剛 1999年より
- ㉞ 前掲書『日本陸海軍辞典』
- ㉟ 前掲書『日本無線史』第10巻より
- ㉟ 西郷町誌編さん委員会編『西郷町誌』下巻1976年 西郷町役場
- ㉞ 美保関海軍望楼については、美保関町才の沿岸部に「望楼下」と呼ばれる場所が存在しその周辺に存在している可能性が考えられる。『月刊 山陰の釣り4』2000年 よなごプレス社
- ㉞ 防空監視哨については、以下の文献を参照している。
- 島根県警察史編さん委員会編『島根県警察史』昭和編 1984年 島根県警察本部
- ㉞ 原剛・安岡昭男編『日本陸海軍辞典』1997年新人物往来社 によれば、1941年頃から電波警戒機が全国の警戒要点に展開配置されていたようである。
- ㉞ 特設見張所については、次の資料によっている。前掲「海軍用地及び同施設引渡目録（追加の分）」1945年、呉海軍警備隊 1945年「兵器軍需品施設等目録」「日本無線史』第10巻
- ㉞ 前掲書『島根県警察史』資料編
- ㉞ 前掲書『島根県警察史』昭和編
- ㉞ 篠川郡斐川町直江に所在した「大社航空基地」関連した調査がいくつか見られ、池橋達雄、陰山慶一、槇原善則・足立正氏、松江南高校社会部の研究がある。また高射砲陣地を発掘調査した例も存在しており、県内では戦争遺跡に着目して発掘したものでは初例となる。
- 池橋達雄『斐川の海軍航空基地』2000年11月 島根史学会資料
- 槇原善則・足立正『川の中の飛行場（汗と涙の青春、新川基地）』1998年
- 陰山慶一『今甦る山陰海軍航空隊「大社基地」』島根日日新聞社 1996年
- 県立松江南高校社会部『大社基地』2000年11月 島根史学会資料
『平野遺跡群発掘調査報告書I』島根県斐川町教育委員会 1983年
- ㉞ 菊池実 2000年「近代戦争遺跡調査の視点」『季刊考古学—特集 近・現代の考古学—』72号 有山閣
- ㉞ 前掲 桜井準也 1999年「目黒区大橋遺跡出土の近代遺跡—使用者の聞き取り調査を通じて—」
- ㉞ 前掲 桜井準也 1999年より